

校訂の確かさや版刻の精美さで近世刊本の最高傑作と評される、国書的一大叢書。「丹鶴叢書」全154冊とその関連資料を網羅的に集録した初の影印集成、全36巻。

監修・解説 朝倉治彦

「丹鶴叢書」発刊一五〇周年・大空社創立一五周年記念出版



六葉火取母  
高一寸  
径三寸三分  
在籠銀

残部  
1組  
2026.1



全三六巻

四回分割配本

学術資料出版

大空社出版

\*表紙の挿絵・紋様は第32巻『丹鶴図譜』より

\*この案内は本書発刊時 のものです。  
(大空社 1997-98年)

## 発刊にあたり

朝倉治彦

江戸時代、いや、今日に及ぶ日本の長い出版史のなかで、「丹鶴叢書」ほど洗練された出版物はそう多くはあるまい。

「丹鶴叢書」は、紀州家付家老で新宮城（一名・丹鶴城）主の水野忠央が集めた中から選んだ古典の複製叢書である。弘化四年（一八四七）から嘉永六年（一八五三）までの七年間に板行された七帙（五四冊）まで残念ながら中絶したが、当初は一千巻を目指すという壮大な計画のもとに進められた、中古・中世の国書の一大叢書であった。

忠央は、文芸や有職故実に通じ、藩校の督学山田常典、小中村清矩、黒川真頼、臼井嘉一、柳川春三といった国学者・漢学者・洋学者らの協力を得て、文庫「丹鶴書院」に和・漢・洋の書籍約四万点を蒐集した。これらの蔵書に加えて、仲田顯忠、井上文雄、新見正路等の架蔵本からも、特に貴重なものを見落して毎年一帙ずつ刊行していく。全二五四冊に収録された古典籍は記録・歌集・家集・物語・絵巻・説話など四三点で、その大半が当時未刊の稀観書であった。

「丹鶴叢書」が優れているのは、単に所収典籍の稀少性のみにあるのではない。有能な学者を多く集めて資料蒐集・調査にあたらせるなど準備に相当の力を入れたこと、現存する校正刷り（静嘉堂文庫蔵）からも分かるように校訂が言語を絶するほど厳正であったこと、板木も最上のものを使い明治期の国定教科書に再利用されたことなど、「丹鶴叢書」の調査・編集・印刷にいたる徹底した管理と、費用を惜しまぬ出版は江湖の出版物の比ではなかった。校訂から版刻まであらゆる面で近世出版物の最高水準と言われる所以である。

しかしながら、「丹鶴叢書」全冊を彌える機関は、内閣文庫を始め全国数カ所である。このほか、「丹鶴外書」など忠央の他の出版物でも全て閲覧できるような機関はどこにもない。このうち「丹鶴叢書」については、従来、国書刊行会の翻刻でしか読むことができなかつたが、これには「風蘭津連奈幾物語」など四点が未収録であり、完全なものではなかつた。いずれにしても「丹鶴叢書」の特長を活かすなら、やはり影印が望ましい。

このたび、大空社創立一周年の記念出版の一つとして、「丹鶴叢書」全冊と、「丹鶴外書」など関連資料五点、さらに丹鶴書院の蔵書台帳「新宮城書藏目録」までを、ことごとく集めて影印に付す「本丹鶴叢書」を刊行することになった。これは、「丹鶴叢書」と、忠央の出版との全体像を探る総合資料であり、誠に喜ばしい限りである。

今年は「丹鶴叢書」が発刊されて、ちょうど一五〇年である。忠央の一千巻の夢は叶わなかつたが、本叢書が忠央の偉業を確実に子孫へ伝えてくれるであろう。時宜を得たこの出版が将

平成九年三月

## 【丹鶴叢書とは】

「丹鶴叢書（たんかくそうしょ）」は、江戸末期、紀伊国新宮城主・水野忠央（ただなか）が編んだ国書の叢書で、歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録など四三点の珍書・稀観書を集録、全七帙（五四冊）からなる。弘化四年（一八四七）～嘉永六年（一八五三）の七年間にわたり刊行。各帙は刊行年の干支により、丁未（弘化四年）・戊申（嘉永元年）・己酉（嘉永二年）・庚戌（嘉永三年）・辛亥（嘉永四年）・壬子（嘉永五年）・癸丑（嘉永六年）の名称を付す。

水野忠央は新宮城（一名・丹鶴城）の藩主で、有職故実に詳しく、藩校の督学・山田常典や小中村清矩・黒川真頼ら和漢洋の各専門家の協力で集められた約四万巻の蔵書（文庫名「丹鶴書院」）を中心、他の蔵書も含めて以上に珍書・稀観書を翻刻（一部覆刻）していく。当初一千巻を目指したが、経済的負担も大きく、また政情不安や忠央の失脚により途絶えた。

本叢書は、校訂の確かさと

版刻の精美さでは比類がないと言われ、装飾本の一種とも見なせるものである。出版動機には政治的意図も考えられるが、主として学術的立場からの出版であった。所収の国書は多くが未刊行本で、その校正刷り（静嘉堂文庫蔵）の注意書きによれば、板木彫刻に対する注文は言語を絶するほど嚴重であった。また、板

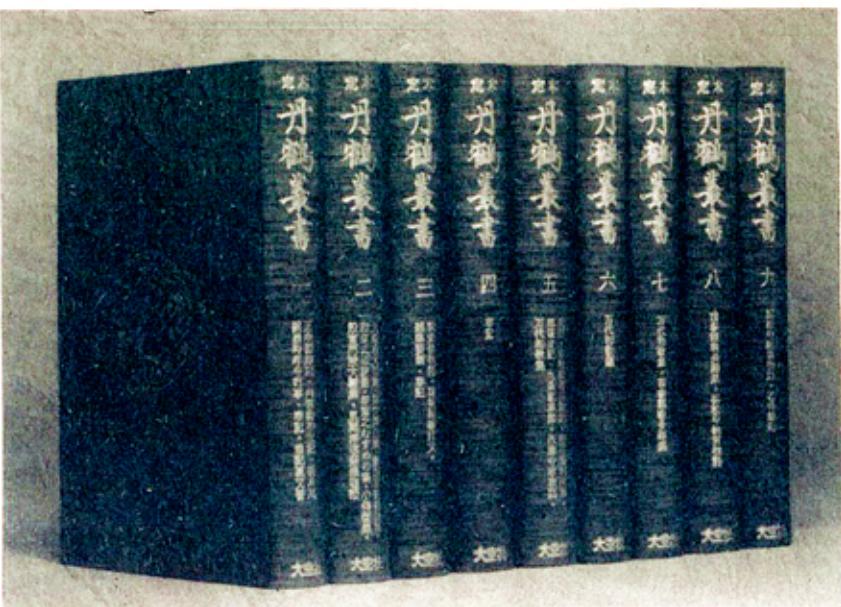


木も極めて良質であり、明治期に入つてから国定教科書の板木に再利用されている。内容から装丁まで、あらゆる点で神經の行き届いた叢書であった。

江戸幕府は一〇万石以上の大名の古典出版を推奨したが、新宮城三万五千石という小落にもかかわらず、以上のような壮大な刊行を企図し、本叢書と併せて「丹鶴図譜」「千歳例（ちとせのためし）」など近世版本の最優秀とも言うべき出版を行なつた点は特筆すべきことである。

本叢書は一部市販され、明治期に部分的に再刊されたものもあつたが、彌布対象の大半が幕府要人と諸大名に限られたため、現存部数が少なく、さらに完本は極めて少ない。完本またはほぼ揃つた所蔵機関として、内閣文庫・大阪大蔵宮御文庫・福井松平・宮内庁書陵部・竜門文庫など、全国数カ所にすぎない。

群を抜く精美な版刻と精確な校訂。——「丹鶴叢書」はいわば当代最高水準の「知」と「技」の結実であつた。この世紀の出版の発刊一五〇年を記念して、全一五四冊と関連資料六点（一八冊・四帖）に解説を付録した決定版、『定本丹鶴叢書』全三六巻を堂々刊行!!



▼組見本（原寸\*ただし余白部分一部カット）第二〇巻「日本書紀傳」（神代卷）中の一頁。嘉元四年（一二〇六）書言本の模刻である。「一書曰…」としていくつもの別伝を割注に併記するが、この特異な形式は中国『三国志』の注例にならったものと言われる。

至貴曰尊自余日命並  
訓義舉等也下皆效此也 次國秩繼尊次  
豐饒淳尊凡三神矣軌道獨化所以成  
此純男 中自有化生之神号國帝立尊亦  
曰國庶 立尊次國徒越尊亦曰國徒立尊亦  
次豐國主 尊亦曰豐組野尊亦曰豐香郊  
野尊亦曰浮經野豊原尊亦曰豐國野尊  
亦曰豐鬻野尊亦曰董木國野尊亦曰見

推薦します

『定本丹鶴叢書』出版の意義

遠藤和夫

『定本丹鶴叢書』の刊行を喜ぶ

酒井憲二

最初、「定丹鶴叢書」の出版の報に接した時、朱墨の区別も既然とした活字翻刻版のものが既に普及しており、その後の善いテキストも出版されているのに、今更という感じを抱いた。しかし、内容見本の「後水尾院年中行事」以下の図版で、初めて「丹鶴叢書」の本来の姿が明らかになつたことを思い知らされ、その感想は誤りであったことに気付いた。

例えは「屋葉利歌集」は「続々群書類從」の底本として使われているが、それには「こゝのへをかすみへたつるすみかにも春つける鶯のこゑ」とあって、「丹鶴遺書」本来の姿の「つけづる」という本文に「く物語」と傍記してあることを知ることはできない。「続々群書類從」の校訂方針で仕方がないことだが、他にも「侍中群要」では頭注の異本の校合が無視されていたりして、鉛々たる学者の苦心の跡が埋没してしまい、そこに物語られるはずの真相は分からぬままに終わる。

また活字本では、全て正字体は統一されていて、漢字の詳細な使用状況は知り得ない。天台宗と書いても、天臺宗とは書かないと」という例のように、字体の相違が重要な事実を物語ることもあるので、本来の姿を見ることは欠かすことができないことなのであるが、活字本ではそれができない。換言すれば、これまでの「丹鶴叢書」では眞実への到達は難しいということになる。

\* この案内は本書発刊時 のものです。  
(大空社 1997-98年)

一本正經作隱書  
對燕序言及先  
君事

一歲人武云、寃平二年

龍大辨橘廣相奉 勅作之

凡歲人之爲姦也內則奉陪述習外則呂佈諸司職  
掌之草誠可嚴重朕虛眇之性愚而文愚寢食之間  
日慎一日歲人等湏叙位除目間奏議政之場逼所  
聞得無是無非慎勿外漏苟既月實充調曲吟詩之  
序秉杖醉何無戲慎勿傳語苟殿上非達喧嘩盡  
惡隨聞必加糺彈慎勿隱悉奉傳勃官下百官若有  
違道必可也謹慎勿默止苟呂佈諸司之役不肥時  
當番記事無大小慎勿遺脫苟時雖復應呂等慎

一 備前草皮等の不用或は老者或は病者馬  
鹿と呼ぶ。後ハ夏冬と云ひ凡時も是と云ふ  
す男の機ホ御免る同。

一 女中懷姫の時土月ら帶の日懷姫の人より御様を  
其内必この事のわらんとおん上常の御舟にて御さ  
うつて春と姫あそびうり小りて二歳を度  
一の年中より老若の所と云ふ若齋二月三月の本座の  
人二歳より其人別天益と改め其とよき  
ニ就らる御事二春と當日着帶の下行と云ふ  
と云ふ次後天益との時も天益の外ハシマリノ別事

「侍中群要」…多彩な活動で知られる平安期漢詩人橘廣相の代表作。有職故実書。(第10巻)

「後水尾院年中行事」…後水尾天皇撰。江戸初期の宮廷年中行事や故実を伝える。(第1巻)

(調布学園女子短期大学学長)

(國學院大學教授)

## 幕末の「知の体系」の解説のために

## 郷土の誇り、「丹鶴叢書」の複刻を喜ぶ

宮地 正人

山室 喜久夫

和歌山藩附家老で新宮城主の水野忠央は、幕末政治史では、二代将軍継嗣問題における南紀派の謀将として、幕府文久改革での被処分者の一人として記憶されている。しかしながら彼は、洋式帆船丹鶴丸の建造者、異能の洋学者柳川春三や傑出した軍事科学者宇都宮三郎の発見者、そして第二次征長の役において長州藩諸隊と互角に戦い得た強力な新宮藩兵の組織者でもあった。

そればかりではない。江戸定府の中央は、多くの学者の協力を得ながら、和漢洋にわたる厖大な良書・古典籍の集書をおこなつていった。その活動は、国史、国文、西洋科学といった近代国民国家が創り出した学問体系以前の、古代と現代を、洋の西と東を、複眼的・統合的に把えようとする近世後期・幕末期特有の「知の体系」によって裏づけされたものである。

この集書活動の成果が、学界で定評ある「丹鶴叢書」の刊行であった。そこには、水野忠央の学術への熱い思いがこめられていない。藩校督學山田常典をはじめ、律令格式研究の権威者小中村清矩や、黒川春村と並び、「都下の無二」の「物シリ」と評された内藤広前等、当時一流の学者達の協同作業の結晶でもつたのである。

忠央は和漢洋の学に通じ、それぞれ一流の学者を招いてこれを優遇し、自らも本居宣長を師とし、その弟子山田常典を叢書編纂の主宰とし、小中村清矩等当時の鍾々たる学者を編纂委員として、厳密な校訂のもとに「丹鶴叢書」が実現したのであり、これは紀州の傑物、水野忠央にして初めてなし得たことであろう。今回の出版は、学術的意義が極めて大きいばかりでなく、新宮に生まれ熊野を愛する者として欣喜にたえず、心から祝福し推薦する次第である。

(東京大学史料編纂所所長)

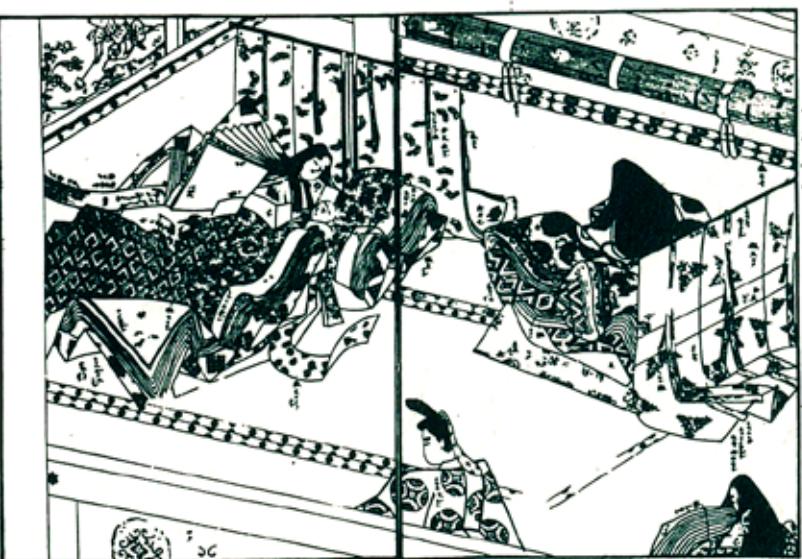
(新宮市教育委員会教育長)

このたびの「丹鶴叢書」複刻の快挙に満腔の敬意を表するものである。既に周知のように「丹鶴叢書」は幕末に発行されたものだが、江戸時代を通じてこれほど広範囲に、そして稀覯の珍書・墨宝までも収集・編纂されたものは他に類を見ないと言わざるほど、貴重な文献である。

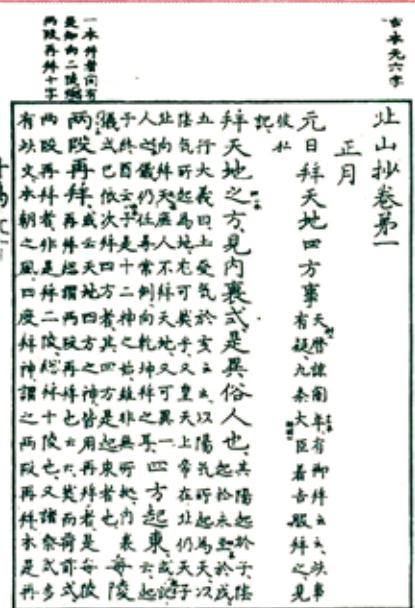
この膨大な叢書を実現した、幕末の新宮城主水野忠央なる人物は現今で言うマルチ人間で、幕末の井伊大老と思想的に共鳴して氣脈相通じる仲であったと言われ、紀州家の幼君慶福を第一四代將軍に擁立した影には、忠央の並々ならぬ政治力があったとされる。そのほかに、洋式軍事訓練の導入や、産業振興の面で多くの事績を残している。

他方、江戸藩邸では家臣に小唄を作らせて楽しみ、自らもその道をたしなんだと言われ、江戸趣味の風格はいつの間にか郷里に伝わり、新宮城下に狂歌・都々逸・川柳など雑俳をやる風流人が輩出するに至り、その気風は明治・大正・昭和へと受け継がれ、大石誠之助、西村伊作(現文化学院創立者)、佐藤春夫へと伝わったのではないか。

のではないだろうか。



「紫式部日記絵巻」…絵巻。詞・絵とも各24段。作者不詳。『紫式部日記』のうち、消息文の部分などを除いたほぼ全文を詞書として絵巻物に仕立てたもの。丹鶴本は模刻。(第28巻)



「北山抄」第1巻…藤原公任作。10巻にまとめたのは後人という。有職故実書。(第26巻)

【卷構成】

第一回 第一〇九卷

「正中御飾記・内宮御神宝記」一冊  
「後水尾院當時年中行事」二冊  
「春記・春記裏文書」二冊

丁未帙(弘化四年) 一冊

第一〇卷 四〇八頁

「侍中群要」四冊(第一~四冊)

第一卷 四四〇頁

「信実朝臣集(信実朝臣家集撰)」一冊  
「草根集」三冊(第一~三冊)

第一二卷 四〇二頁

「信実朝臣集(信実朝臣家集撰)」一冊  
「草根集」四冊(第四~七冊)

第一三卷 四八〇頁

「草根集」五冊(第八~一一冊)

第一四卷 四六四頁

「草根集」三冊(第一三~一五冊)

第一五卷 四三六頁

「蒙古襲来繪詞」三冊

第一六卷 四〇〇頁

「三中口伝(三条中山口伝)」三冊

第一七卷 四〇四頁

「今昔物語集」六冊(第九~一四冊)

第一八卷 四六六頁

「今昔物語集」六冊(第一五~二〇冊)

第一九卷 三六二頁

「今昔物語集」二冊(第二~二二冊)

「忍者物語」一冊

庚戌帙(嘉永三年) 一七冊

第二回 第一〇九卷

「口酉帙(嘉永二年) 一四冊

第一〇卷 四〇八頁

「信実朝臣集(信実朝臣家集撰)」一冊  
「草根集」三冊(第一~三冊)

第一一卷 四四〇頁

「侍中群要」四冊(第一~四冊)

第一二卷 四〇二頁

「信実朝臣集(信実朝臣家集撰)」一冊  
「草根集」四冊(第四~七冊)

第一三卷 四八〇頁

「草根集」五冊(第八~一一冊)

第一四卷 四六四頁

「草根集」三冊(第一三~一五冊)

第一五卷 四三六頁

「蒙古襲来繪詞」三冊

第一六卷 四〇〇頁

「三中口伝(三条中山口伝)」三冊

第一七卷 四〇四頁

「今昔物語集」六冊(第九~一四冊)

第一八卷 四六六頁

「今昔物語集」六冊(第一五~二〇冊)

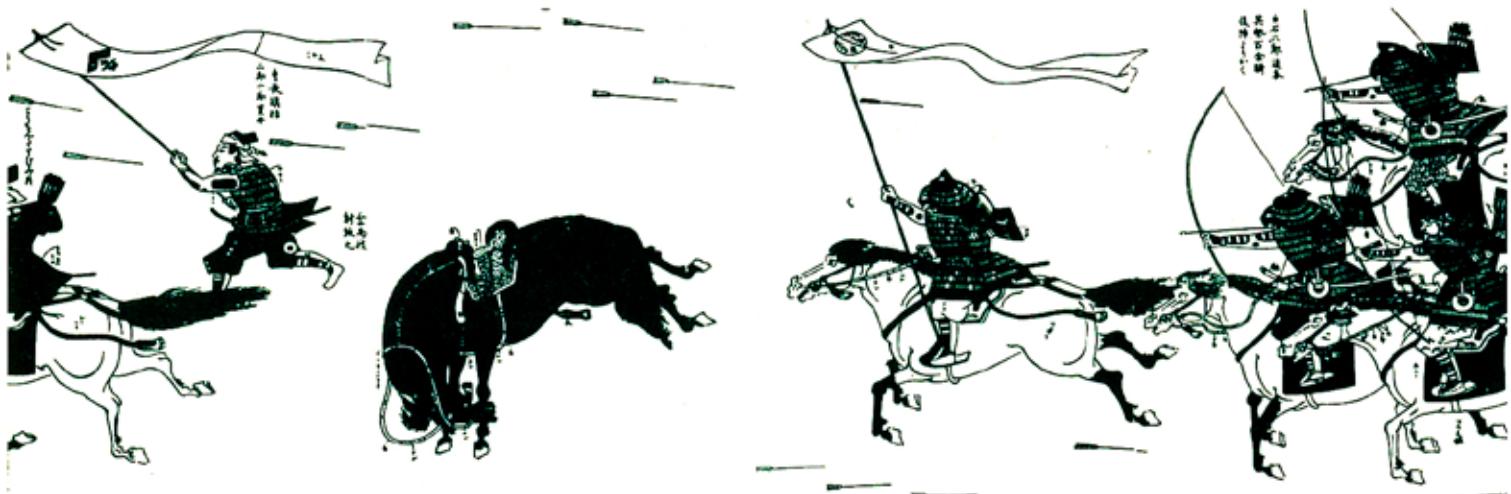
第一九卷 三六二頁

「今昔物語集」二冊(第二~二二冊)

「忍者物語」一冊

庚戌帙(嘉永三年) 一七冊

- 第一回 第一〇九卷
- 「正中御飾記・内宮御神宝記」一冊  
「後水尾院當時年中行事」二冊  
「春記・春記裏文書」二冊  
「和泉式部続集」二冊  
「源重之むすめの集・小侍従集・殷富門院大輔集」一冊  
「風爾津連奈幾物語」二冊
- 第二回 第一〇九卷
- 「草根集」一冊  
「秋葉供物図・諸陵雜事注文」一冊  
「雜筆要集」一冊  
「春記(別本)」四冊(第一~四冊)  
「春記(別本)」六冊(第五~一〇冊)
- 第三回 第一〇九卷
- 「春記(別本)」一冊(第二~一冊)  
「室町殿春日詔記」一冊  
「摺子藤原次第・諸鞍日記」一冊  
「九条家車図」一冊  
「西園寺家車図」一冊  
「万代和歌集」二冊(第一~二冊)  
「万代和歌集」四冊(第三~六冊)
- 第四回 第一〇九卷
- 「万代和歌集」四〇〇頁  
「万代和歌集」四冊(第七~一〇冊)
- 第五回 第一〇九卷
- 「前參議教長卿集」三冊(第一~三冊)  
「浜松中納言物語」四冊(第一~四冊)
- 第六回 第一〇九卷
- 「浜松中納言物語」四冊(第五~八冊)
- 第七回 第一〇九卷
- 「乙寺縁起」一冊
- 第八回 第一〇九卷
- 「前參議教長卿集」二冊(第四~五冊)  
「東大寺要錄」四冊(第一~四冊)
- 第九回 第一〇九卷
- 「東大寺要錄」六冊(第五~一〇冊)
- 第十回 第一〇九卷
- 「東大寺要錄」五二二頁  
「風葉和歌集」四冊
- 第十一回 第一〇九卷
- 「風葉和歌集」四冊



「今昔物語集」四冊（第一～四冊）

第一四卷 三九〇頁

「今昔物語集」四冊（第五～八冊）

第一五卷 四二四頁

「今昔物語集」四冊（第九～一二冊）

\* 朧五軒

第二六卷 四二四頁

「北山抄」五冊（第一～五冊）

第二七卷 四四二頁

「北山抄」五冊（第六～一〇冊）

第二八卷 四〇四頁

「北山抄」三冊（第一～一三冊）

〔大納言〕経信卿集 一冊

〔紫式部日記繪巻〕一冊

「日本總國風土記」一冊

第二九卷 三四四頁

「古事談」六冊（第一～六冊）

第三〇卷 三五二頁

「古事談」一冊

「基盛朝臣鷹狩記」一冊

「和歌一字抄」一冊

〔丹鶴外書〕ほか 一八冊・四帖

第四回 第三一～三六巻（付録・解説）

第三一卷 四四〇頁丹

「大系図画引便覽」四冊

第三二卷 三五六頁 \*□ 絵色刷り

「史籍年表」一冊

「丹鶴図譜」三帖

「千とせのためし」一帖

第三三卷 三四四頁

「新宮城書藏目録」四冊（第一～四冊）

第三四卷 三三二頁

「新宮城書藏目録」三冊（第五～七冊）

第三五卷 四四二頁

「編纂本朝尊卑分脈図脱漏」三冊／解説ほか

王子軒（嘉永五年）二〇冊

### ▼「華古襲来絵詞」（第一四巻）

作者不詳。二巻。絵巻。竹崎家に伝わっていた原本は転々として、現在、宮内庁蔵。永仁元年（一一九三）頃成立という。文永・弘安の二度の元寇に際して出陣した肥後国家人、竹崎五郎兵衛尉季長の戦闘の模様を描いたもの。特に甲冑と馬の描写に優れており、往時を生き生きと伝える。

### ●丹鶴書院の全貌を映す「新宮城書藏目録」（第三三～三五巻）

水野家の三棟の書蔵に集められた書物は、明治期に散逸してしまったが、帝國図書館旧蔵の「新宮城書藏目録」一〇冊によってその全体像を知り得る。同目録は、丹鶴書院の界線紙に精写された水野家蔵書の原簿であり、年々の実物引き合わせの検印を探してある。一〇冊のうち一冊は漢籍を收め、経史子集に分類し、他の九冊は国書を所収して次のように分類してある。

（一）記録・有職・補仕・系図・伝記・私書

（二）法帖・図画・字書・書目・楽・香・鷹・花押・茶・刀剣・伊勢小笠原両家書

（三）医書・本草・農書・蘭書・翻訳書

（四）和歌・物語・草子類

（五）隨筆・難書

（六）神書・国史・南朝史・雜史・年表・鄆陵・曆・地理

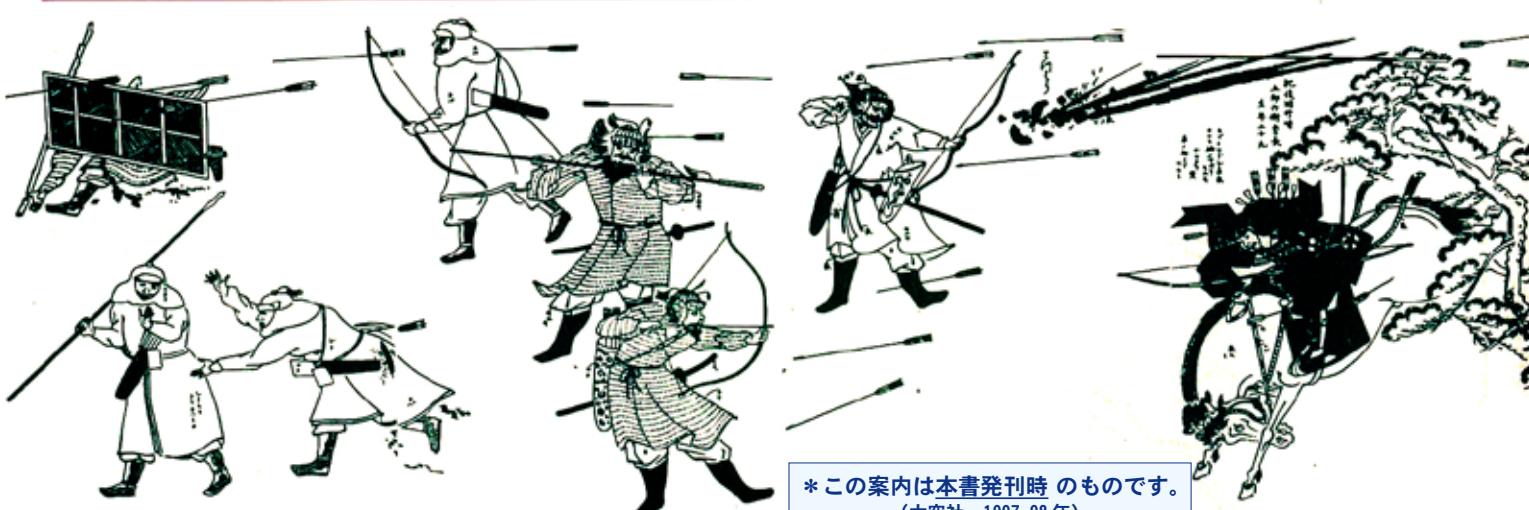
（七）御当家書

（八）古文章・繪巻物・御手元御草筋御本箱・御模絵・御数寄屋建絵図・珍書

（九）七印・謡・春印・直印

この目録から想像される蔵書は、漢籍に比して国書が極めて豊富で、蒐集が多方面にわたっているのが特徴である。

下巻	中巻	上巻
新定私教	金澤文庫	一巻
台記季本	古寫	一冊
春日祭次第	中御門宣流御筆	一巻
春日社記	裡古文書	一巻
芳野記	京法禁門定家卿自序 建番三年冬十月 指染刻	一巻
家勝經音義	長井雅善御筆 正平七年正月 共三冊	有板札



\*この案内は本書発刊時 のものです。  
(大空社 1997-98年)

校訂の確かさや版刻の精美さで近世刊本の最高傑作と評される、国書的一大叢書。  
「丹鶴叢書」全154冊とその関連資料を網羅的に集録した初の影印集成、全36巻。

\*この案内は本書発刊時 のものです。  
(大空社 1997-98年)



# 定本 丹鶴叢書



◆監修・解説 = 朝倉治彦  
◆全36巻（「丹鶴叢書」30巻+付録・解説6巻）／4回分割配本  
◆A5判／上製／布クロス装／1巻平均420頁

全36巻 創本体 526,000円+税

第1回 9巻 (1-9巻) [1997.4] 4-7568-0263-X 本体 131,000円+税  
第2回 10巻 (10-19巻) [1997.9] 4-7568-0264-8 本体 146,000円+税  
第3回 11巻 (20-30巻) [1998.5] 4-7568-0265-6 本体 161,000円+税  
第4回 6巻 (31-36巻) [1998.9] 4-7568-0266-4 本体 88,000円+税

\*挿絵は「東大寺宝物琵琶螺鈿玉装」図（第32巻『丹鶴図譜』より）。



残部  
数組

2026.1

## [丹鶴叢書と本書の特色]

「丹鶴叢書（たんかくそうしょ）」は、江戸末期、紀伊国新宮城主・水野忠央（ただなか）が編んだ国書の叢書で、歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録などを43点の珍書を集録、全7帙154冊からなる。弘化4年（1847）～嘉永6年（1853）の7年間にわたり刊行。各帙は刊行年の干支により、丁未（弘化4年）・戊申（嘉永元年）・己酉（嘉永2年）・庚戌（嘉永3年）・辛亥（嘉永4年）・壬子（嘉永5年）・癸丑（嘉永6年）の名称を付す。

本叢書は、校訂の確かさと版刻の精美さは比類がないと言われ、一種の装飾本とも見なせるものであるが、主として学術的立場から行なわれた出版であった。所収の国書は多くが未刊行本で、その校正刷り（静嘉堂文庫蔵）の注意書きによれば、板木彫刻に対する注文は言語を絶するほど嚴重であったという。また、極めて良質な板木を使用しており、明治期に入ってから国定教科書の板木に再利用されている。

本叢書は一部市販され、明治期に部分的に再刊されたものもあったが、頒布対象の大半が幕府要人と諸大名に限られたため、現存部数が少なく、さらに完本は極めて少ない。完本またはほぼ揃った所蔵機関として、内閣文庫・大阪天満宮御文庫・福井松平・宮内庁書陵部・竜門文庫など、全国数カ所にすぎない。

以上のように「丹鶴叢書」は学術上重要な価値を有し、特に国文学・出版史・書誌学上重要な近世資料である。本書は、このほか、「丹鶴外書」を始めとする関連資料をほとんど余すところなく集録した初の影印集成である。「丹鶴叢書」の特長を最もよく活かせるのは影印出版であり、「図譜」ではカラーの口絵も掲載。明年（平成9年）で「丹鶴叢書」発刊150周年を迎えるまさに時宜を得た出版といえよう。

## [底本]

国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・筑波大学蔵本。

## [巻構成]

### 第1回 第1～9巻

第1巻 「正中御飾記・内宮御神宝記」ほか／第2巻 「九条右大臣集・御堂闇白集・家経朝臣集」ほか／第3巻 「駿鏡供物図・諸陵雜事注文」ほか／第4巻 「春記（別本）」／第5巻 「春記（別本）」ほか／第6巻 「万代和歌集」ほか／第7巻 「万代和歌集」ほか／第8巻 「前参議教長卿集」ほか／第9巻 「浜松中納言物語」ほか

### 第2回 第10～19巻

第10巻 「侍中群要」／第11巻 「信実朝臣集」ほか／第12巻 「草根集」／第13巻 「草根集」／第14巻 「草根集」ほか／第15巻 「三中口伝」ほか／第16巻 「今昔物語集」／第17巻 「今昔物語集」／第18巻 「今昔物語集」／第19巻 「今昔物語集」ほか

### 第3回 第20～30巻

第20巻 「日本書紀（神代卷）」ほか／第21巻 「東大寺要録」／第22巻 「風葉和歌集」／第23巻 「今昔物語集」／第24巻 「今昔物語集」／第25巻 「今昔物語集」／第26巻 「北山抄」／第27巻 「北山抄」／第28巻 「北山抄」ほか／第29巻 「古事談」／第30巻 「古事談」ほか

### 第4回 第31～36巻（付録・解説）

第31巻 「大系図画引便覧」／第32巻 「史籍年表」ほか／第33巻 「新宮城書蔵目録」／第34巻 「新宮城書蔵目録」／第35巻 「新宮城書蔵目録」／第36巻 「編纂本朝尊卑分脈図脱漏」・解説ほか

学術資料出版  
**大空社出版**



東京都東村山市秋津町5-24-13-101(〒189-0001)

TEL:042-306-3383 / FAX:042-306-3384

www.ozorasha.co.jp / eigyo@ozorasha.co.jp